

書評

小山虎編著

『信頼を考える』

(勁草書房、2018年)

久木田 水生

社会的動物である人間にとって、他者と協力し合えるかどうかは文字通りの死活問題であり、そして協力を円滑にするために重要なのが互いに対する信頼である。しかし相手を信頼するということは裏切られるリスクに自分の身をさらすことでもある。では私たちはどのような状況においてどこまで他者を信頼すべきなのか。人々の間の信頼を醸成しやすい環境はどのようにして築くことができるのか。そもそも人間はどのようにして裏切りのリスクに対する不安を克服して、相互の信頼に基づく協力関係を達成できているのか。これらは社会に生きるすべての人間にとって重要な問いである。

これらの問いは社会の様々な場面、階層、人間関係の中で現れてくる。それゆえに問いの具体的な内実や、問いに答えるためのアプローチは多角的であらざるを得ない。実際、信頼は様々な分野・領域において重要なテーマとして取り扱われている。しかしながら個々の分野が扱っているのは信頼の特定の側面に過ぎない。それらの側面が互いにどのように関連しているのかを考察し、より幅広い視点から信頼を掘り下げる研究、すなわち信頼についての学際的・分野横断的な研究はこれまでにあまり行われてこなかった。そこで信頼に関する学際的研究のための足掛かりとして、様々な分野・領域において信頼がどのように取り扱われ論じられているのかを一望できるように意図して書かれたのが本書である。

本書では、哲学、倫理学、社会学、政治学、心理学、教育学、ロボット工学、人工知能などの分野における信頼に関連する研究がサーベイされている。読む人によってどの章が面白いのか、役に立つかは様々だろう。評者は科学技術と社会の関係を専門にしているの、技術・企業・政府などに対する信頼をテーマにした章は参考になった。また大学で働く教員として、あるいは子を持つ親と

して、教育における信頼を扱った章は強い関心を持って読んだ。

編者による前書きにある通り、本書は学際的な信頼研究のための「ガイドブック」であることを目指しており、本書自体が学際的な研究の成果という訳ではない。本書に収められている論文はそれぞれ特定の分野において、信頼がどのような意義を持ち、どのように問題化され、どのように論じられているかを紹介している。ただ各論文は完全に独立という訳ではなく、全体として信頼研究の起源と発展、そして様々な分野への広がりという流れが概観できる形に構成されている。また多くの論文が「信頼チャート」と呼ばれる共通のフォーマットを用いてそこで論じられる信頼概念を特徴づけており、分野間の違いや共通点が比較しやすいようになっている。とはいえ論文によって、全体の構図や他の収録論文をどれだけ意識しているか、あるいはその分野に不案内な読者の役に立つように書かれているかは、かなりばらつきがあるという印象を受けた。

どんな本であれ、一冊で関連する重要な論点のすべてを網羅することなど不可能なので、安易に「これこれ扱われていないのはけしからん」というような批判をするべきではない。それでも本書が学際的な信頼研究のためのガイドブックを標榜している以上、ゲーム理論と進化心理学の専門家が参加していないのは残念と言わざるを得ない。ゲーム理論（あるいはそれに端を発する道具立てや思考のフレームワーク）は本書でたびたび言及されていることから分かるように、現代的な信頼研究（特にリスク分析や合理的意思決定と関連する部分）の中核をなすものだと言える。また進化心理学には、本書が信頼研究の源流と位置付けるホップズが想定する、「自然状態」のあり方（すなわち「すべての人によるすべての人に対する戦い」）の妥当性を疑わせる研究、信頼に関する非合理的非認知的側面に関する研究が豊富に存在している。本書ではこの非合理的非認知的側面の扱いが手薄に感じられて（8章と11章では論じられているが）、少々物足りなさを感じた。